

1 取り組みの概略・経緯等

香美町は、兵庫県北部の但馬地域に位置し、町の中心を南北に横断する矢田川水系に沿って、耕地や居住地が形成されている。

内陸部は、1,000m 級の山々に囲まれ、面積の約 86% を林野が占めており、年間を通じて降水量が多く、冬期には積雪が 2m に達することもある。

兵庫県は全国で唯一、閉鎖育種による但馬牛集団の改良を行っており、美方郡は現在でも郡内のみで生産された但馬牛の閉鎖育種を行っている。

香美町小代区で産まれた種雄牛「田尻号」は、全国の黒毛和牛の 99.9% がこの血統を引くと言われ、黒毛和牛の肉質改良に大きく貢献しており、本地域の遺伝資源は国内黒毛和牛の育種改良にとって極めて貴重なものとなっている。

また、兵庫県美方郡では全国に先駆けて、人間の戸籍に当たる「牛籍簿（牛籍台帳）」を整備し、但馬牛の厳正な個体管理や育種改良を進めてきており、但馬牛の飼育を通じて、草原や棚田の維持、農村文化の継承にも貢献してきた。

この歴史的にも価値のある「兵庫美方地域の但馬牛システム」は、平成 31 年 2 月 15 日に日本農業遺産に認定されたことは、兵庫県内で初めて、畜産分野では日本で初めてのことであり、引き続き世界農業遺産への認定申請が行われているところ。

このように、美方郡の但馬牛生産基盤の確保は、全国的にも重要であるが、繁殖雌牛頭数はピーク時 1950 年代には、4,000 頭を超えていたが、その後、年々減少し、平成 27 年 2 月現在では 1,961 頭まで減少した。

地域の繁殖雌牛頭数が 2,000 頭を下回った場合、近交係数が大きく上昇することは過去の経験で分かっており、但馬牛改良の停滞及び但馬牛ブランド力の低下に繋がることから、飼養頭数の確保が喫緊の課題となっていた。

このような中で、香美町の繁殖雌牛頭数は美方郡全体の 60% 以上を占め、平成 23 年 2 月以降は、増加傾向を維持していたが、平成 26 年 2 月、ついに減少に転じ（1,288 頭 → 1,277 頭）、平成 27 年 2 月現在には 1,223 頭となった。

このため香美町では、但馬牛の増頭に向け、肉用牛農家の施設整備を支援することを目的として、中心的経営体（44 戸）と地域の関係機関から成る香美町畜産クラスター協議会を組織し、平成 27 年 11 月 18 日に設立した。（事務局 香美町農林水産課）

本協議会では繁殖但馬牛頭数の拡大のため、中心的な経営体における規模拡大及び新規就農者の施設整備によって増頭を図ること、併せて地域全体の担い手の育成、雇用の拡大、放牧の推進、堆肥流通量の健全化、但馬牛肉販売量の増加によるブランド力の強化等を図ることで地域全体の但馬牛関連収益力の向上を目指した。

なお、機械の導入を支援する協議会は県内の地域を広域的に支援する組織として、本協議会とは別に設立されている。

2 取り組みの「目標」・「目的」・「目指したもの」

(1) 繁殖但馬牛頭数の増加

地域の自治体、農協、但馬牛生産者等が一体となって、但馬牛の原産地としてのブランド力向上と育種改良推進のため、飼養頭数の増加及び地域全体の収益性向上を目指した。

(2) 雇用促進と担い手の育成

中心的な経営体における規模拡大及び新規就農者による施設整備の実施を支援することで、新たな雇用の促進と担い手の育成を図ることを目指した。

(3) 放牧の推進と堆肥の流通拡大

放牧面積の拡大によって省力化と生産コストの低減を図る。

また、良質堆肥の生産と地域外の稲作農家等への流通面積を拡大することで、農地の土壌改良を促進し、高付加価値米等の生産拡大を目指す。

(4) 但馬牛ブランド力の強化

6次産業に取り組む多頭農家を支援することで、神戸ビーフ（但馬ビーフ）の供給量を拡大とブランド力強化によって、地域収益性の向上を目指す。

●畜産クラスター計画の目標

項目	平成 26 年度	【目標】 令和 3 年度
繁殖但馬牛	1,223 頭	1,400 頭
新規就農者	2 名 1 法人	3 名 1 法人
認定農業者	14 名	18 名
畜産経営体雇用者	16 名	18 名
放牧面積	185.9ha	190.9ha
堆肥流通量	2,231 t	2,963 t
但馬牛肉販売	86,503 円	106,799 円

3 組織・機構

(1) 関係する組織・個人

- 中心的な経営体 4 3 戸（うち新規就農者 4 戸）※設立時 4 4 戸
- 香美町和牛振興会
- たじま農業協同組合
- 香美町（農林水産課、村岡地域局農林建設係、小代地域局農林建設係）
- 兵庫県（豊岡農林水産振興事務所、新温泉農業改良普及センター）

(2) キーパーソンの有無（今後の見通しも）

株式会社 上田畜産（代表取締役 上田伸也氏）

香美町内で最多の肉用牛を飼育し、繁殖・肥育・販売までの一貫経営を実践し、自社の

精肉店で独自ブランド「但馬玄（たじまぐろ）」を販売する傍ら、地域又は全国の畜産共進会等へ積極的に出品し、受賞歴多数。

高い生産技術と経営戦略を実践する経営モデルとして、本地域の肉用牛生産を牽引する中心的な役割を担っており、本協議会設立当初からの会長でもある。

(3) 畜産クラスターの中で、キーパーソンの位置づけ・役割

- 但馬牛の生産・経営基盤拡大と雇用の拡大
- 担い手育成
- 6次産業化の推進
- 但馬ビーフの観光資源による消費拡大及びPR

(4) 畜産クラスターの拠点となる施設等のハードの有無

香美町では堆肥処理施設2カ所（小代堆肥センターと村岡有機センター）を管理し、主に中規模以下の農家の堆肥を受入れし、生産堆肥の販売に取り組み、ブランド米（「つちかおり米」、「但馬村岡米」等）生産農家との連携を図っている。

なお、畜産クラスター事業で整備した施設等は次のとおり。

中心的な経営体	実施年度	実施内容
株式会社上田畜産	平成28年度	繁殖牛舎 495㎡×2棟（100頭規模） 堆肥舎 365㎡×1棟
	平成29年度	堆肥舎 306㎡×1棟
	平成30年度	肥育牛舎 498㎡×2棟（100頭規模）
新規就農者1戸	平成28年度	繁殖牛舎 495㎡×1棟（40頭規模） 繁殖雌牛 6頭

4 個別事例調査

(1) 概要

- 経営名：株式会社上田畜産
- 経営形態：但馬牛一貫経営（繁殖・肥育・販売まで）
- 飼養規模：繁殖牛330頭、肥育牛600頭
- 施設等：牧場3カ所（小代第1牧場、小代第2牧場、村岡牧場）
- 直売店「牛匠上田」2カ所（城崎温泉駅前通店、小代店）

(2) 調査内容

ア 牧場施設等

今回、調査した小代第2牧場は、平成28年度畜産クラスター事業で繁殖牛舎2棟と堆肥舎1棟を、平成30年度の同事業で肥育牛舎2棟を整備。

当牧場では、主に初産から2産目までの繁殖雌牛と子牛の育成を行う。

2産目までの子牛は免疫が弱い傾向にあったことから、専用の牧場で管理することで病気の予防に繋がった。

繁殖牛舎 495㎡× 2 棟 (100 頭規模)



肥育牛舎 498㎡× 2 棟 (100 頭規模)



イ 牛の健康にこだわって設計された自家配合飼料の給与

牛の消化と第1胃の発酵を良好にし、牛舎の環境を整えることで、牛にストレスを与えず健康に管理することができ、繁殖牛は丈夫な子牛を産み、肥育牛はおいしい肉質になる。

このため、配合飼料には「そば・ごま・あわ」など天然素材を中心とした独自配合の餌「セサミヘルスフィード」を与え、糞の状態等、牛をみながら常に成分量を微調整している。

粗飼料のバミューダグラスはアメリカに直接買付けに行き、品物を確認してから購入している。

飼養牛はいずれも毛ツヤが良く、糞の状態が良好であることから管理の良さが覗えた。



ウ 戻し堆肥の利用

独自飼料によって、糞の状態をコントロールすることで、床替えの頻度が少なくなるだけでなく、戻し堆肥の製造が容易となる。

便の性状と堆肥舎のプロワー・配管システムにより、2週間で切り返し1回、28日で戻し堆肥の完成を可能としている。

戻し堆肥は副資材を一切使用せず、3回程度の利用を繰り返した後、畑作農家への提供を行う。

1月の調査時で堆肥舎4区画中の2区画を使用、約300頭の牛がいる牧場とはとても思えない程、堆肥の積載量が少なく、雨が降っていたが、どの牛舎も臭いが少なく、牛床の状態も良かった。



堆肥舎 365㎡



戻し堆肥を利用

工 枝肉販売部門

肥育牛は約30%が市場出荷、約70%が自社販売で、うち約50%が卸販売で、約20%が直売店での精肉販売を行っている。

平成26年に兵庫県豊岡市城崎温泉に直売店「牛匠上田」を、平成28年には香美町小代（本社）に2号店をオープンした。

自社ブランド「但馬玄（たじまぐる）」として販売し、融点が低くあっさりとした脂身の口どけの良さと、赤身の深い風味が評価され、順当に販売額を伸ばしている。なお、自社販売牛肉の販売先は上田社長が1頭1頭枝肉を確認し、取引先のニーズに合わせて振り分けている。



自社販売枝肉



直売店「牛匠上田」小代店

オ 担い手の育成

本協議会の中心的な経営体は、43戸となっており、その年齢構成を見ると20代・30代の割合が高く、その背景には株式会社上田畜産の存在が大きい。

株式会社上田畜産では、いずれは自分で牛飼いを始めることを夢見ている県内の農業短大や農業高校を卒業した若者を研修生としてではなく、正社員として採用する。社員として責任のある管理を任せることで、経験を積み技術を高めてほしいとの思いによるものであり、独立する時には全面的にこれを支援している。

平成 28 年度には株式会社上田畜産からの独立者が新規就農し、畜産クラスター事業で 40 頭規模の牛舎を建設している。

株式会社上田畜産では独立後もこの農家をアルバイトとして契約し、経営が安定するまでの支援を行うだけでなく、独自配合飼料を提供する等、地域の新規就農を後押ししており、新規就農者のトレーニングセンターとしての役割を担っている。

カ 経営の経過

年	経営の経過
平成 2 年	上田代表が高校卒業後、1 年の研修を経て就農 祖父から 12 頭の母牛を譲り受け、繁殖経営を開始
平成 5 年	就農 3 年目、第 75 回兵庫県畜産共進会において名誉賞を受賞 以降、平成 30 年（第 100 回）まで名誉賞 8 回
平成 8 年	古電柱を用いた繁殖牛舎を建設し、繁殖頭数 50 頭に拡大
平成 9 年	第 7 回全国和牛能力共進会（岩手県）出場 以降、平成 29 年（第 11 回）まで出場 4 回
平成 13 年	繁殖牛舎を村岡牧場内に建設
平成 16 年	低コスト牛舎の建設（スーパー L 資金活用、牛舎、運転資金） 自家産の子牛で肥育を開始、臨時雇用の開始
平成 18 年	肥育牛舎の完成（近代化資金活用・牛舎） 常時雇用の開始
平成 20 年	香美町小代区貫田にある旧公社の繁殖牛舎を購入
平成 21 年	株式会社上田畜産を設立 簡易繁殖牛舎を小代第 1 牧場内に建設
平成 22 年	繁殖牛舎を小代第 1 牧場内に建設
平成 23 年	繁殖牛舎 2 棟を小代第 1 牧場内に建設
平成 24 年	牛の健康を第一に考え、飼育方法と飼料原料を全面的に変更
平成 25 年	自社ブランド「但馬玄（たじまぐる）」を商標登録 子牛の生産～肥育～販売の完全一貫経営に取り組む
平成 26 年	直売店「牛匠上田」を豊岡市の城崎温泉に開店（6 次産業化推進整備事業） 第 178 回神戸肉枝肉共励会において名誉賞受賞
平成 28 年	自己資金で村岡牧場内に肥育牛舎 2 棟を建設 畜産クラスター事業で、小代第 2 牧場内に繁殖牛舎 2 棟と堆肥舎 1 棟を建設 牛の健康を考え、牛舎等の敷料に「戻し堆肥」の利用を開始 海外から乾草の直接仕入れを開始 自社の食肉加工施設を取得、同場所に「牛匠上田」2 号店を開店
平成 29 年	畜産クラスター事業で、村岡牧場内に堆肥舎を建設 小代第 2 牧場内に自己資金で分娩牛舎を建設
平成 30 年	畜産クラスター事業で、小代第 2 牧場内に肥育牛舎 2 棟を建設

5 収益性の向上に資する取り組みの内容

(1) コスト低減・生産プロセスに係るもの

- 飼料コスト及び労力低減のための放牧面積拡大

放牧面積：185.9ha（H26）→ 180.8ha(H30)

うち水田耕作放棄地 2.3ha(H26) → 5.6ha(H30)

※ 鹿の食害等による牧草地の減少等により、放牧面積が縮小

(2) ブランド化・高付加価値化に係るもの

- 神戸ビーフ、但馬ビーフの地元消費拡大のための精肉販売、加工などの拡大及び地域ブランド力強化と生産拡大

(3) 販売額の増加に係るもの

- 子牛生産頭数拡大のため繁殖雌牛飼育頭数の増加

繁殖雌牛頭数：1,223 頭（H26）→ 1,396 頭（H30）

6 支援体制

「美方郡産但馬牛」世界・日本農業遺産推進協議会（構成員：香美町、新温泉町、JA たじま、美方郡和牛育種組合、両町観光協会・商工会、県関係機関等 23 組織）を組織し、「兵庫美方地域の但馬牛システム」の日本農業遺産への認定と世界農業遺産への認定申請を行っているところであり、県外及び世界を視野に積極的な PR 活動を行うことで、但馬牛の生産拡大と、生産農家の収益性の向上を支援している。

その他、主な支援内容は次のとおりであり、畜産クラスター事業に参画する組織をはじめとする地域の関係機関が一体となった支援体制を構築している。

- 町内 2 カ所の堆肥センターでの中小規模農家の堆肥受け入れ
- 町内の幼稚園、小学校、中学校全てに学校給食への食材提供（年 3 回× 30kg）による食育活動
- 新規就農者等に対する、県普及センターが中心となつての技術指導
- 新規就農者確保のため、ひょうご就農支援センターや地元農業高校と連携しての、就農前の面会及び就農に向けた支援
- 他地域からの就農希望者が早期に地域になじめるよう、農家体験研修の実施や、就農受入れ農家を対象とした研修会・意見交換会の開催
- 郡内繁殖雌牛の保留、希少系統確保のための県・町・JA 等による助成

7 情報交流

協議会総会における各種事業の紹介と生産者等による意見交換、また、町、JA 等が行う品評会・共進会の場において、生産者間による情報交換が行われている。

香美町を含む美方郡は、後継者や外部からの若い人材が比較的就農している地域であり、平成 17 年に上田社長が呼びかけて発足した「みかた和牛会」には現在 14 人が参加し、定期的に勉強会・視察等を行っており、新規担い手の定着のための重要な情報交流の場とな

っている。

なお、本会は株式会社上田畜産で修業した人が中心となっているが、35歳で定年することとなっており、今年から上田社長の長男が入会するなど、地域の後継者での人間関係の継承が図られている。

8 波及効果

町内繁殖雌牛、肥育牛ともに増頭傾向で推移している。

若手農家を中心にクラスター事業に関する問合せが増加し、今年度、若手農家1名が規模拡大のために25頭規模の牛舎2棟と堆肥舎の新設を行っている。

9 まとめ

本協議会では、地域内で但馬牛の繁殖、肥育及び販売までを行う、株式会社上田畜産をキーパーソンとして位置付け、この規模拡大及び販売力の強化を支援することで、但馬牛繁殖雌牛の拡大、地域ブランド力の強化及び雇用と新規就農者の増加による担い手の確保等を目指してきた。

地域のキーパーソンである株式会社上田畜産は、これまでに畜産クラスター事業を活用し、繁殖牛舎2棟、肥育牛舎2棟及び堆肥舎2棟を整備し、繁殖雌牛・肥育牛を各100頭増頭、繁殖雌牛300頭、肥育牛600頭への規模拡大を行うと併せて、販路先の新規開拓によって牛肉の自社販売の取扱量を着実に増加させるとともに、自社ブランド「但馬玄」の販売拡大による但馬牛のPRを行ってきた。

また、株式会社上田畜産は、新規就農を目指す若い担い手を自社の正社員として採用し、肉用牛生産のトレーニングセンターとしての役割を果たし、平成28年度には株式会社上田畜産から独立した新規就農者が繁殖雌牛40頭規模の牛舎を整備するなど、地域の担い手の育成にも貢献してきた。

一方で、鹿の食害等によって草地が減少し、新たな草地造成が困難なことから放牧面積が減少、また頭数増加に伴う糞尿処理の問題等、課題も残されているが、そのような中にも戻し堆肥利用による堆肥の滞留解消の実践等、課題解決に向けた取組も着実にしている。

本協議会における取組は、但馬牛の原産地としてのブランド力の向上と育種改良の推進を図るために、地域の一経営体をキーパーソンとして位置付け、協議会として一経営体の取組をバックアップするとともに、経営体自らもキーパーソンとしての役割を認識し、地域の規模拡大、担い手の確保、ブランド力の強化等に積極的に取り組む姿を地域に示すことで、若者を始めとした但馬牛生産者の経営モデルとなっており、このような取組は他の地域にとっても大いに参考となるものである。

閉鎖育種により守られてきた但馬牛の血統は、国にとって貴重な財産であり、この血統を確保できない場合、国全体の肉用牛改良が停滞すると言っても過言ではないことから、本協議会の今後の取組に期待したい。

(水元 健二、吉元 博昭)